

失った過去

作者 齊藤和彦

僕の最愛の妻（美紀）は1997年十二月二十日、深夜未明に二十四年と言う短い人生に終止符を打った。死因は十代の頃から伴っていた癌が二十四の誕生日を過ぎた頃から急変して、看病の甲斐も虚しく去年の暮れに自室のベッドの僕の横で、眠る様に静かに息を引き取った。十代の時に一度癌が発見されてから再三注意をして来ていたのだけれど、結婚や共稼ぎの日々と彼女の元気な笑顔、いや今思えばそれは元気な笑顔ではなく、ひとり苦痛を抱えていても元気そうに振舞っていた彼女の生活であり、少しの安心と少しの……。イヤ限りなく僕だけの身勝手過ぎた油断と情け無いほどの（定期健診にさえ行かせてあげられなかった）経済的生活苦で、検査を疎かにしていた事も振り返れば事実だった。と言うよりもその事を思えば、後悔とか無念とかそんな綺麗な言葉では飾る事は出来ない。ただの僕の犯した過ち。僕が犯して来た最も罪深い僕の罰。彼女が居なくなって、生まれて初めて僕はその罪の大きさ、そして償い切れない程の罰の重さ。そんなモノを彼女が死んだあの日から僕はそんな重く暗い心の独房へと一人で入った気がした……。

僕と妻（美紀）が出会ったのは僕がまだ二十二歳で、彼女が丁度二十歳の時だった。その頃の僕は小説家なんてモノを夢みている、でも当然書いた作品などで食えるはずも無く。仕方なくアルバイト生活をしていて、彼女はその僕のバイト先にお客として僕の前に初めて現れたのだ。

その頃の僕とは言う、夜は横浜の関内と言う駅の近くのブルーバードと言う名の小さなショットバーでパーテンドーをしていて、昼間の空いた時間に小説を書いていた。その頃の生活は正直言って、夢の為だけの生活とはとても言えなかったのかもしれない。確かに夢は追い掛けてはいた。けれど田舎から憧れを持って出て来て約二年間が経ち二十二歳と言う若さの僕には、周りに散りばめられた煌びやかな世界に心を奪われそうにもなるものなのだ。その頃の僕は正直言ってそんな欲望と夢の狭間をきつと歩いていたのだろう。色々な人と出会い、そして色々な話が聞けると思ってアルバイトしたショットバーも今振り返ってみて、そこで覚えたモノと言えば、カクテルの作り方と女の口説き方位のモノだった。二十歳の時に親の反対を押し切って田舎の国立大学を中途退学し、そして飛び出して来た故郷は、決して振り返ることの出来ない思い出の場所だった。それまでの僕はどちらかと言うと親の言いなりになる、俗に言う優等生だった。勉強をしろと言われてれば言われた通りに勉強したし、高校、大学と親の望む道を歩んできた。いわばそれまでの僕は親にとって世間で言う両親にとっては自慢の箱入り息子だった。

そんな僕も大学二年の時にフツとしたきっかけでそんな自分に嫌気がさした。それは自分を変えたかったのかもしれないし、もしかするとそんな当たり前に引かれたレールを歩くことが出来なく成ったのかもしれない。その本当の理由は今はまだ分からない事だったが、とにかく理由や訳はどうであれ僕はそんな何もかもから保障され守られていた日々を捨てた。そして誰の同情も受けずに一人で上京をした。誰の同情も受けずに旅だった僕にとっては孤独と言う生活は日常茶飯事に成りつつあった。けれどそんな孤独な悲し

みもこの街では金さえあれば慰める（埋める）事が出来た。

都会と言う街では金さえあれば何でも手に入れられるものなのだ。地位も名誉もそして一時の慰めでさえ金で買うことが出来た。そんな中で僕は何か人生の深い闇の底に溺れて行く感覚さえあった。それは小さい時に川沿いにあったヘドロの泥沼に足を浸かった時の鈍く締め付けられるように沈んで行き、やがて自力だけでは身動きが取れなくなってしまうような、そんな感覚に良く似ていた。ズブズブっと浸かり、締め付ける感覚、必死にあがけばあがく程にその泥は僕の体に粘り付くように締め付ける。だからと言ってじっとしていたとしても、体は少しずつ体重に比例して泥沼に浸透していく。まあ小さい時はそれでも近くの雑草に手を伸ばせばそれで自力でなんとか這い上がる事も出来た。けれど二十歳過ぎで体験した泥沼にはそんな気の利いた藁は無く、少しずつその毒牙に染まっていた……。

僕が二十歳で上京して来て初めて泥沼に手を染めたものはドラッグ（覚せい剤等）だった。ドラッグと一言と言っても種類は様々だった。LSDにコカイン、マリファナにハッシシ、そしてスピードにシャブ。そんな中で僕が一番ハマッタのがヘロインだった。何度かの地獄の様な嘔吐を繰り返し、それで初めてヘロインは僕を受け入れる。ダウン系のヘロインはアップ系の覚醒剤やコカインとは違って興奮こそ少なかったが、常に不安の中に居た僕にとっては中枢神経に興奮を与えるアップ系ドラッグよりも、抑制的に働くダウン系のドラッグ、ヘロインこそ理に適ったドラッグだった。二十年代、三十年代と騒がれた当時の流行文豪達が手を出していた薬物にもヒロポン、バビナル等がある。そして誰もがそんなものに染まり名作をこの世に残していった。僕が初めてドラッグを手にした夜、僕はそんな事を考えていた。けれど僕がドラッグに手を出してそして染まっていくうちに、その考えは少しずつ変わっていった。きっと僕は違ったのだろう。僕は自分の才能に息詰まった訳では無く、ただ心の弱さの逃げ道にドラッグに染まっただけの事なんだ。そして目の前にある快樂に自分の寂しさを重ねようとしただけの事だったのだろう。本当に築き上げた地位の長さ比べると、落ちると言うことは余りにも早くほんの一瞬の出来事ようだった。

箱入り息子が秩序を外れてヘロインに手を出せば、行き着く末（場所）は限られていた。アルバイトで稼いだ金はヘロイン代と娼婦（売春婦）に注ぎ込まれる。バーテンダーと言う仕事をしていると色々な人間に会う。その中にはドラッグのバイヤー（売人）も居た。だからドラッグ自体は正規ルートよりも格安で手に入れる事が出来た。けれどいくら格安と言っても、普通にバイトをしていただけでは当然足りず、ドラッグを他の客に上増し横流しをしたり、性欲に溺れた中年に売春を斡旋し紹介料を受け取ってそれを生活費に当てていた。勿論そんな堕落した暮らしの中では創作活動なんて寂れたモノだった。妥協で書いた作品は誰の心にも響くことは無く、当然そんな作品の一つ一つは誰にも認められる事は無かった。そんな中で作品もそうであったが、僕が当時一番求めていたものは、もしか

すると、たった一つの理解だったのかもしれない。親や友達、そして世間は誰も僕を理解してはくれない。親の反対を押し切って大学を中退して夢を追いかけた事や、そして当然こんな奈落の底に落ちるところまで落ちた僕なんて世界中を探したって、誰一人として理解なんてしてはくれない。それは親の反対を押し切った時から分かっていたけれど、実際それを体感するのは本当に苦しいことだった。所詮この世は勝てば官軍、負ければ賊軍なのだ。結果を出ささえすれば僕は優秀や立派だとかと呼ばれる事に成るだろうが、結果を出せなければただの負け犬と呼ばれるだけの事なんだ。それまでの課程や努力なんてモノは結局誰にも理解なんてされるものでは無いものだった。そして僕はそんな誰にも理解されない日々を過ごしている中で一人の女性に出会った。彼女の名前は一色美紀(いっしきみき)と言う名前の女性だった。

彼女は僕の働くショットバーに時々顔を出すお客さんだった。彼女の第一印象は少し陰のある、でも綺麗な女性という印象だった。初めて彼女と言葉を交わしたのは僕が彼女に注文を聞いた時のことだ。

「お客様、飲み物は何にいたしましょうか？」

と僕が普通の言葉を並べて言った台詞に、彼女は少しためらいながら

「何かラムをベースにしたカクテルをお願い出来ますか？」

と言った。

それが僕と彼女の最初のやり取りだった。それから何度か彼女は店に現れた。

彼女が店に来る時は何故か決まって一人だった。バーのカウンターに一人で座る彼女はいつもどことなく寂しさを醸し出していた。彼女は何処かのOLをしていたらしく、バーに来るときの服装はいつもきちとしたビジネススーツに身を包んでいると言う出で立ちだった。バーテンダーの仕事と言うのはお酒を作る事は勿論のこと、それ以外にも一人で来たお客の話し相手もしなくてはならない事もあった。

「今夜の飲み物は何にいたしましょう」

と僕は決まり切ったような言葉を口にした。

「そうね、マルガリータをお願い出来ますか」

「はい、分かりました」

僕はそう言ってテキーラにホワイトキュラソーとライムジュースをシェイクし、カクテルグラスの縁に塩をつけたスノースタイルにして置いたグラスにそれをそそぎ込んだ。その間彼女は窓越しに写る横浜の静かな夜景を遠目に眺めていた。

「どうぞ、マルガリータです」

僕はそう言って白く雪解けの様に濁ったマルガリータを彼女の目の前に置いた。

「ありがとう」と彼女は言った。

「最近のOLは大変なんでしょ？ 嫌な上司にも愛想を振り回さなきゃならないし」

僕はさり気なく言う。

「そうですね」

けれど彼女はまるで他人事のように答えた。

「お客さん、何かお悩みでも？」

「えっ、どうしてそう思うんですか？」

彼女は少し驚いたように僕にそう聞き返して来た。それは諦めていたモノに希望の光がほんの少し差し込んだ。まるでそんなような感じだった。

「あっ、いやただマルガリータを頼むお客さんと言うのは大概何かを忘れたい事がある方が多いもので。失礼ですがお客さんはOLなんですよ？」

「分かりますか？」

「ええ、格好を見れば大体分かります」

「そうですね。こんな洒落っ気も無いビジネススーツなんて来ていると色気ないですものね」

そんな溜め息混じりに言う彼女に僕は言った。

「そんな事無いですよ。他のお客はともかく貴方は別格ですよ」

「ありがとう、そんな事言ってくれた人初めてです」

カクテルグラスに口を付けて恥ずかしそうに言う彼女には独特な色気があった。

「そんな事無いでしょ。もしもそうだとすれば世間の男の見る目が無いんですよ」

「あらそんな事言われると、今夜は雪でも降るんじゃないかしら」

幸い店には他の客が居なく、僕等はたわいも無い会話をした。そして彼女は二杯目のカクテルを注文しながら言った。

「私のことはもういいから、バーテンダーさん？ 貴方の事を少し聞きたいわ」

「僕のことですか？ 僕は何の取り柄も無いただのバーテンダーですよ」

僕はシェイカーを振りながら答えた。店はカウンターと幾つかのテーブルだけが置かれた小さな店、BGMはプラターズのオンリー・ユーが静かに流れていた。店長は他の店の様子を見に行くといい残し、二時間位前から出掛けて行った。だから店の中は完全に二人だけの貸し切り状態のようだった。

「バーテンダーと言う仕事は私みたいに淋しい人の愚痴を聞かなきゃならないから大変なんですよ？」

彼女は溜め息混じりにそう呟いた。そして僕はその溜め息を紛らわすように。

「そんな事無いですよ。人を慰められるなんて良い事ですよ」

僕はそう言いながらカクテルグラスにピンクに染まったカクテル、マリアエレナを注いだ。

「慰めてくれるか・・・」

彼女は思い詰めた様に言った。僕はそんな彼女に尋ねてみた。

「お客さんやっぱり何か悩み事でもあるんですか？」

そう僕が言うと、彼女は寂しそうにそれに応えた。

「私の悩みはね、絶望的なモノなの。だから誰かに相談しても駄目なの。それより私は貴方の事が聞きたいわ」

「僕のことですか……。そうですね、僕も絶望的な事なのかもしれませんね。実は僕こう見えても小説家を目指しているんですよ。けれど全然芽が出なくて……」

「バーテンダーさんは、いやその前に名前を教えてくださいませんか？」

「あっ名前は風間星治（かぜま せいじ）と言います。失礼ですけどお客様の名前は何と言うのですか？」

「私は一色美紀（いっしき みき）と言います。それで風間さんは小説を今も書いているんですか？ もしも出来れば是非読まして貰いたい。作者風間星治さんが書いたと言う小説を」

彼女はカクテルに口を付けずに言った。

「つまらないものですよ。きっと暇つぶしにもなりませんよ。ただ時間だけが無駄に過ぎる様なモノですから」

「それでも読みたいわ。どっちみちこの世の時間なんて元々無駄なんですから」

彼女はそう言って、結局僕等は次の日に自分の書いた小説を持って来る約束を交わし、そしてその日彼女はカクテルを三分の一ほどグラスに残して夜の街に消えて行った。

次の日は午後九時ちょっと前に彼女は店に現れた。彼女は一旦家に帰って着替えでもしたのだろうか、その日はいつものビジネススーツとは違って黒のワンピース姿で現れた。

「今日はいつもと違いますね」

僕はそんな彼女に言った。

「ええ、今日は実は私の誕生日なのでちょっとお洒落でもしようかと」

けれど一人で誕生日を過ごす彼女の言葉にはどことなく寂しさがあった。

「そうなんですか、おめでとうございます、じゃあこれは僕個人からのサービスです」

僕はそう言ってお祝い事に相応しい、シャンパンを使ったカクテル、シャンボールロワイヤルを彼女の前にそっと置いた。

「ありがとう、けれど誕生日に一人で来るなんて淋しい女なんて思わないでね。色々あるんです人生は。それより貴方が昨日言っていた小説を是非見せて貰えませんか？」

「ええ、それは構わないですが、本当につまらないモノなんで、果たしてお気に召すかどうか……」

僕はそう言って封筒に包んだ小説を彼女に手渡した。

「これは預かってよろしいんですか？」

「ええ、コピーはありますから」

結局その日は彼女はカクテルを二杯程飲んで封筒を手に店を後にした。それから数日間彼女は姿を見せることは無かったが、一週間程した頃だろうか、彼女はまたブルーバード

に現れた。

「どうでしたか？ 僕の書いた小説の方は、面白く無かったですか？」

僕は少しの期待も無くたずねてみた。実際今までも何人か僕の小説を読んだ人は居た。けれど誰一人として良かったよと言う事は言わず、なんて言うのかあれだなと話を濁す者が殆どだった。勿論書いている自分はそんな事は無く、面白いと思って書いていたが、周りの反応を見ればその出来栄は傍から見て面白くは無いは明白だった。けれどそんな僕の問いに答えた彼女は違っていた。

「とても面白かったわ。特に主人公が誰にも認められずに墮落して行くところなんて、リアリティーがあって同情出来たわ」

彼女は本当に不思議な事を言った。主人公が墮落して行くところは料理で言えば妻に当たるところでメインでは無かった。けれど彼女はその部分が良かったと言った。

「正直初めてですよ。面白いと言ってくれた人は、でも何故主人公が墮落して行くところに同情されたんですか？」

彼女はカクテルグラスを傾けながら少し考えてから小さな声で言った。

「そうね、私と一緒になのかもしれないわね」

「一緒に言うと？」

「何て言うのかな、主人公の落ちていく気持ちが手に取るように分かるって言うのかな。きっと主人公は誰でもいい、たった一人の理解者が欲しかっただけなのね」

彼女はそのズバリをいとも簡単に言っただけだった。所詮僕が書いた小説には僕自身がどうしたって反映されてしまうものなのだ。

「ひょっとして貴方も良き理解者に恵まれていないと？」

「こないだの誕生日の時に分かったでしょ。私は誕生日にひとりぼっちで淋しいお酒を飲む女なんです」

彼女は淋しそうに呟く、僕はそんな彼女にほんの少し心が引かれ始めていた。

「あっそうだ、僕今日は早番なので十時には上がられるんです。もし良かったらその後何かで一緒に飲みにも行きませんか？ 小説の感想ももう少し聞きたいです」

そんな僕の急な提案に彼女は快く引き受けてくれた。それから僕が仕事を上げるまで彼女はカクテルを片手に僕を待っていてくれて。そして十時過ぎに僕の仕事上がりと同時に僕等はブルーバードを後にして、夜の街に繰り出す事にした。

金曜日の夜の街は十時を過ぎても賑やかさがある。明らかに高校生と分かる若者も居れば、仕事上の嫌なコトを酒で忘れよとしている中年のサラリーマンも居る。僕等はそんな中静かな場所を探して歩いた。関内駅から十分もしない所にフローラと言う雰囲気の良い店があったので僕等はそこに行くことにした。フローラは大通りから少し外れた場所にいたので、地元の人以外にはあまり知られていなかったのも、落ち着いた雰囲気を味わいたい時に僕が良く行くお気に入りの店の一つだった。

店の中は案の定金曜日の夜だと言うのに、客は二、三人しか居らず、テーブルの半分以上は空席だった。マスターは黒人のボブと言う名で、日本語が苦手なのだから、あまり話しかけて来ない無口なマスターもこの店の魅力の一つでもあった。

彼女はサイドカーのラムバージョンのエックスワイジーを頼み、僕はウオッカベースのソルティードッグと簡単なおつまみを頼んでから話を始めた。

「さっきの話の続きですが、お世辞抜きで僕の小説は第三者的が見てどうなんでしょ？」

僕にとっては何と言っても小説の事が一番気になっていた。

「私がさっき言ったのはお世辞なんかじゃないわ。本当に面白いと思ったのよ」

「でも他のみんなは誰一人面白いなんて言ってくれはしないんですよ」

そんな僕の愚痴っぽい言葉に、彼女は少し躊躇（ためら）うように考えていた。そしてそんな彼女の考えている仕草は色気のあるものだった。

「それはきっと誰も本当に悲しい思いをしたこと無いだけなんじゃないのかな。だから風間さんの小説を理解できないだけの事よ。例えるなら人は生まれながら孤独なのに、それを誰一人認めようとしないように。多分孤独を感じた時に初めて風間さんの作品の良さは理解出来るように成ると思うわ」

「悲しみと孤独ですか・・・」

「そう悲しみや孤独。今言ったように人は生まれながらにして孤独なの。だからいつだって誰かに理解されたいと思うものなのよ。きっと風間さんも誰かに理解されたいんじゃないかしら、風間さんの作品を読んでいるとそう感じるの」

彼女は何かを思い出すような仕草をして更に話を続けた。

「それともう一つ絶対的に足りないものがある気がするの」

「絶対的に足りないものと言うと？」

彼女はテーブルに置かれたエックスワイジーをひとくち口に言って言った。

「あんまり偉そうな事言えないけれど、読んでいて感じた事を素直に言うと、風間さんの小説には事実の愛が無い様な気がするの。勿論愛は描かれていたわ、とても分かり易い愛は。けれど本当の愛はきつともっと違う気がするの。風間さんの描いた愛はとても力強いけれど、本当の愛はもっと弱いモノだと思う気がするの。何て言うのかな、本当の愛はこう触れると壊れてしまいそうな程繊細で弱いモノだと思うのよ。だから人は愛の中に安心と不安を同時に抱くのだと思うんだけど、風間さんの作品には絶対的の不滅のどちらかという現実の愛で事実の愛と言うモノが描けていない気がしたわ。勿論それは誰もが心の奥底に持っている願望なんだと思うけれど、けれどそれはきっと作られた偽りの愛にしか過ぎない気がするの。だからそれを言葉にしてしまうと愛の安売りに聞こえてしまうのかもしれないわね。あっごめんなさいね、こんな偉そうな事言って」

僕は今まで僕が書いた小説を読んでくれた人に、ああだ、こうだ、と言われると、お前らは何も分かっていないんだと言う気持ちばかり前に出ていた。けれど彼女の言った言葉には真実味があり素直に受け入れられるモノが感じられた。

「事実の愛ですか・・・」

「そう真実では無く事実の愛。こんな事聞くのは失礼かもしれないけれど、風間さんは心から誰かを愛した事がありますか？」

彼女は僕の目を見つめながらそう言った。

・・・心から誰かを愛したコト・・・

面と向かってそう言われると僕は言葉に詰まった。記憶を辿れば高校生の時に一人の女の子と付き合った事があった。けれどそこには彼女の言う事実の愛と言う言葉を重ねる事は出来ない様な気がした。あの頃は誰もがそうであった様に愛に対しては真っ直ぐな気持ちだった事は確かだったが、けれど若さの中には真っ直ぐさと未知の欲望は隣り合わせにある。きっと純粋と言うモノは計算高さや欲望、そしてこの命すら超越した先にあるモノで、僕の高校生の頃の愛はまだその域まで達することの出来なかった未熟な愛だった。そして全てを捨てて上京してから何人かの人と恋愛をしたが、それは全て真実や純粋と言う言葉とは無縁のモノだった。そう考えると事実の愛と言う言葉の重みが初めて伝わって来た。

「正直言って無いのかもしれない。だけど一体何を事実の愛と呼べるのか今の僕には分かりませんね」

「事実の愛なんて簡単な事なのよ。風間さんは誰かに弱味や弱さを見せた事がありますか？」

「弱味や弱さ？」

「そう弱味や弱さ。例えば自分が抱えている心の傷だとか悩みだとかそういう類のモノ」

彼女にそう言われて初めてなんとなく事実の愛の意味が分かった様な気がした。振り返ってみても僕は正直誰にも弱味や弱さを見せた事は無かったような気がした。いつも突っ張って、意地を張っていた様な気がする。それは過去に付き合った女の子達だけでなく、友達や親に対してもそうだった。弱味を見せたら負けだといつも自分に言い聞かせていたし、誰かが右を向けと言えば右を向いたし、誰かが左を向けと言えば左を向いていた。例えば自分の気持ちが真っ直ぐに向かいたくて苦しんでいたとしても、平然とした顔で回れ右をしていた。したい事とする事は分かっていたが、した事とさせられていた事とは違った。最初で最後の親への大きな反抗も誰にも相談出来ず、そして自分一人だけで心に決め、決行してしまった。勿論今も僕は誰にも理解されずに、この淋しい都会でたった一人で苦しんでいた。

「君は弱味を見せた事はあるの？」

僕は一色美紀に率直に尋ねて見た。

「私はあります」

彼女はキッパリと言った。あまりにもハッキリ言う彼女の表情には凜々しさすら感じら

れた。

「じゃあもし良かったら君の弱味を僕にも見せて貰えないかな」

僕はその弱みとやらがとても気になって、思わず聞かずにはいられなかった

「ええいいわよ。けれど私の弱味を見せる前に風間さんの弱味を先に見せて貰いたいの」

「僕の弱味？」

「そう風間さんの弱味」

僕はそう言われて少し考えざるを得なかった。弱味はきっと沢山あったのだろう。けれどその量が多過ぎたせいで、どれが本当の弱味か今や分からなく成っていた。けれど僕はその中で一番それらしい事を言ってみた。

「そうですね、僕の弱味はきっと誰からも理解されない事なのかもしれませんね。親もそうだけど、友達もそうです。僕には親友と呼べる友達が居ないんです。殆ど愚痴に成っちゃうけれど今まで誰にも理解されなかったような気がします。僕はきっと生まれつき誰かの言い成りで、自分自身の意志なんて表に出せずに、きっと孤独だったんでしょう」

「風間さん、今恋人は？」

「居ません」

「そう、それはきっと辛い日々だったのですね」

彼女の切ない程の同情がソルティードッグの苦みと一緒に僕の心の中に浸透してきた。

「僕の話はこれくらいで、今度は君の話が聞きたいな」

僕はそう言って話を変えてみた。もしかしたらそれはまた僕の得意の逃げだったのかも知れなかった。

「私の話？」

「そう、君の話」

彼女は少し考えた末に溜め息を付く様に言った。

「私の弱味はもっと絶望的な所にあるの。ねえ、私の胸を触ってみて」

彼女の急なその言葉に僕は一瞬驚いたが、彼女の真剣な目つきに僕は言う通りにした。彼女の胸は大きすぎず小さすぎず、丁度お椀型をした僕好みの胸の大きさだった。けれど軽く触れた指先でもハッキリ分かるように右と左では柔らかさが全く違った。

「分かったでしょ。私は右の胸が無いの。パットを入れているから見た目には分からないけれど、服を脱げばそれはハッキリしていることなの」

「でもどうして？」

「乳ガンだったのよ。高校を卒業して直ぐだったわ、乳ガンが発見されたのは。最初は会社の健康診断の時にそれらしい兆候があると言われたの、そして専門病院での再検査の結果、乳ガンと判明して、乳房ごと摘出したの。要は切除よ。勿論女としても絶望的な事だったけれど、私にとってもっと絶望的な事があるの」

彼女は一度カクテルを口にして、そして自分に言い聞かせる様な口調で話を続けた。

「乳房を切除までしたのに私の体の中にはまだガンがあるのよ」

彼女はそう言って自分の体を抱きしめる様にした。

「ガンがあるって、大丈夫なの？」

「ええ、今はね。血液検査の結果ではガン細胞がある事は分かっているのだけど、まだそれは潜伏していて、今の所は何処に出現するか分からないし、運が良ければこのまま何も起こらない事だってあると医者には言っていたわ。だから今の所は定期検診さえしていれば大丈夫なの」

彼女はそう言って微笑んだが、そこには確かに絶望的な悲しみがあつた。

それから弱味を見せ合った僕等は何度かのデートを重ね合わせて、正式に恋人と成つた。心に病を持つ僕と体に病を持つ彼女と形こそ違つたが求めるモノは一緒だつた。僕等はお互いの傷を慰め合う様に寄り添いあつた。彼女にとってはどうかは分からなかつたが、少なくとも僕にとっては初めて感じた幸せだつた。二十二年間誰にも理解されずに歩いてきた僕にとっては、彼女は女神の様にすら感じられた。そして僕は初めて彼女を抱いた夜の事を今でもハッキリ覚えている。僕等は周りの人間とは違う傷を抱えて人生と言う裏道を歩いていた。そしてそんな僕等に似合う安っぽいモノで造り固められたような寂びれたホテルで抱き合った。それは初めて僕が彼女の傷を慰める時だつた。

古く軋むベッド、白いシートこそ清潔感があつたものの、少しシミの付いた壁紙、ぼんやりと灯す照明は古ぼけたイメージを醸し出していた。僕は明かりをほんの少し暗くして彼女に口付けをした。そしてそのままベッドに倒れ込む様に沈んで行く。彼女のムスクのコロンの香りが微かに僕の鼻につく、僕は優しく彼女の体を包み込み、そして静かに彼女のブラウスの胸のボタンを外し始める。その間彼女は黙つたまま僕に身を委ねる。僕の指先は微かに震えを感じたが、それは僕の震えなのか彼女の震えなのか分からなかつた。彼女の胸のボタンを全て外すと、薄いピンクのブラジャーだけが彼女の傷を最後の無駄な抵抗の様に必死に守る様に現れる。僕は彼女のそのブラジャーを外す前にもう一度だけ彼女に口付けをした。そしてゆっくりと優しくホックを外した。

～言葉なんて無意味なんだよね だから愛しているなんてもう言わないよ

優しさなんて無意味なんだよね だから同情なんてもうしないよ

重ね合わせる勇気は 過ぎ去る愛とは違うんだよね

ボクは今ここに居るよ ボクはずっとここに居るよ

ボクはキミの中 永遠にキミの中にずっと居るから

だからキミはそれだけをただ感じてて欲しいんだ

ボクが永遠にキミの中に居ると言うコトだけを・・・・・・

僕等は約二年間付き合いを経た末に1995年の六月に結婚をした。それは僕が二十四の時、妻(美紀)が二十二の時だつた。それは誰からも祝福されたものでは無かつたが、僕の両親との仲は結婚を機に僕に少しずつ寄りを戻していった。僕の荒んだ生活は彼女と

出会ってからはかなりと変わった。相変わらず夢の小説すら認められないものの、あれだけ染まっていたヘロイン（ドラッグ）や女遊びも今はもう全く無くなった。バイトで続けていたバーテンダーの仕事も今では生活費の拠点と成っていた。勿論バーテンダーの仕事だけでは生活費は足りず、彼女もパートで近くのスーパーマーケットで働いた。彼女の体の方も四年間何も起きず、医者判断では多分このままで行けば大丈夫だろうと言う事だった。そして僕等は新婚生活独特の幸せと忙しさの中で、段々ガンの事は忘れていった。けれど忘れていったと言ってもその性生活の中では彼女が乳ガンだったと言う過去はイヤでも思い出させられる。勿論僕はその全てを受け入れて結婚したんだ。だから左の乳房を愛撫する様に、右の痛々しい傷跡だけが残った胸も愛撫した。彼女は時々「無理をしなくてもいいのよ。乳房の無いお乳を揉んでも楽しくないでしょ」と言ったが、僕は必ずどちらの胸も同じように愛した。彼女が選んだ八畳一間とダイニングキッチンしか無い僕等の1DKの部屋は決して大きくは無かったが、僕等が愛を確かめ合うには丁度良い大きさだったのかもしれない。部屋にはベッドとタンスとテレビと小さなテーブル以外は殆ど無く、カーテンや絨毯は彼女のお気に入りの蝶をモチーフにした柄だった。僕は夜の仕事、彼女は昼間の仕事、必然的に僕等は一緒に居られる時間は限られてくる。僕が仕事に行く前か、帰ってきて彼女が仕事に行く前かの間だけが僕等の共有できる唯一の時間だった。お互いサービス業同士だった事もあって、休みはなかなか合わずに二人で何処かに出かける事は殆ど出来なかった。そんな二人の暮らしに妻はいつでも文句も言わずに過ごしていたけれど、時々買ってくる旅行雑誌や時々見せる淋しそうな顔を見れば、何もかもが満足という暮らしでは無いことは分かっていた。美紀が死んだ今それを考えると本当に淋しい思いをさせてしまったと言う後悔だけが残る。けれどその頃はまさか美紀がこんなに早く居なくなってしまうとは思ってもいなかったから、いつか落ち着いたらゆっくりと二人で何処か遠い所に旅行に行こうと余りにも色々厳しい現実の中での遠い夢を描いていた。そして彼女の様態が急変したのはそんな気持ちのまま一年近くが過ぎた頃だったのだろうか、苦しうに洗面所で倒れて居た妻を朝方家に帰って来た僕が見つけたのが最初だった。洗面所の洗面台には数分前の吐血の後がクッキリとまだ残っていた。僕は直ぐに救急車を呼んで、僕等はそのまま救急病院に向かった。その間彼女の意識はハッキリしていて、大丈夫だから、大丈夫だからと逆に僕を慰めていた。そして精密検査の結果、彼女は胃ガンに成っていたと言う事が判明した。ガンの進行状況はポールマン分類法でいくと、ガンの組織が粘膜層から盛り上がっている限局隆起型（第一型）、胃壁に潰瘍が出来てはいるがガン組織と正常な組織の境界線がまだハッキリしている限局潰瘍型（第二型）、それを通り越して境界線の見分けのつかない浸潤潰瘍型（第三型）、そしてガン組織が粘膜層の下に根を張っている様に広がるびまん浸潤型（第四型）に分かれる。彼女の場合は三型と四型の間に位置すると言う事だった。医師に初めてその事を言われた時に僕の目の前は真っ暗になった。それはいわばもう手遅れだと言う事でもあったのだから。医師に患者本人に告知するかどうか尋ねられた時に僕は告知はしないで欲しいと言った。医師はそれを聞いて胃潰瘍が出来たと

言う事にしましょうと提案した。それから僕と彼女との間では偽りの生活が始まった。

「医者単なる胃潰瘍だって言っていたよ」

「本当？ 私はてっきりまたガンかと思ったわ。それも末期ガン」

「なっ何言ってんだよ。そんなわけないだろ、君はまだ若いんだ、人生はこれからだよ」

「人生はこれからか……。そうよね、まだやりたいこと沢山あるものね」

「そうだよ。まだまだこれからだよ」

彼女は僕の嘘を信じた様だった。けれど僕の嘘には不器用さがあった。一体彼女が僕の嘘を見破ったのはいつ頃の事なのだろう。入院して三ヶ月した位の頃に彼女は僕に突然言った。

「ねえ、最後のお願い聞いてくれる？」

花瓶の水を換えていた僕は彼女のその突然の言葉の意味が分からなかった。

「えっ、最後ってどういう意味なんだ」

けれどそんな僕の動揺にも動じる事無く彼女は話を続けた。

「分かっているのよ。自分の体の事は。二十四年間も付き合ってきたのよ。でもその事に後悔はしてないわ。だからお願いがあるの。私を私達のあの部屋で、迎えさせて欲しいの。私の最期の瞬間を、あなたとの思い出の詰まったあの部屋で、そして私を最期に愛してくれただあなたの腕の中に包まれながら……」

僕は言葉に出来ない自分に対しての嫌悪感があった。彼女は自分の最期を知っていながらそれでもなお自分らしく生きる希望を持っていた。それに比べて僕はただ絶望的な悲しみしか抱けなかった事に悔しさがあった。

しばらく考えてから僕は彼女の気持ちを受け入れる事にした。

「そうだな。家に帰ろう。俺達の家。医者には俺から説明しておくよ。だけど一つだけ約束して欲しいことがある。これからはこれが最後だという言葉は言わないでくれ。信じてさえいればきっと奇跡が起こる事だってあるんだから」

けれど僕の言う言葉は無情にも現実という波の中では無意味なモノにしか過ぎなかった。僕は彼女の言う最後の願いを叶える為に医者に相談した。そして医者の意見はこうだった。

「まあ正直言って奥様の様態はもはや手の付けようが無いのが事実です。勿論手術やこのまま抗がん剤の投入し続けることも出来ますが、始めに言った様に手術や抗がん剤は患者を苦しめるだけの事であって、寿命が数ヶ月伸びる程度の事でしか出来ません。だから今奥様にとって大切な事は残された人生を有意義に過ごす事が大切だと思います。だからもしも退院を希望するのならその意志を尊重してあげる事が賢明かと。勿論急変があり次第病院側も受け入れ態勢をとるつもりですから」

医師の言うその言葉は何処か機械的なものが含まれていた。そもそも余命という言葉はドラマや映画の世界でしか存在しない言葉の様な気がしていた。けれど現実的に余命後何ヶ月と言う言葉を医師から聞かされた時からその言葉は僕の心の中で勝手に物語の中の世界から現実の日常の中で一人歩きし始めて行った。そしてその言葉は今終着駅に辿り着こ

うとしていた。結局彼女は彼女自身の希望の元で病院を退院する事に成った。それから彼女の死ぬまでの一ヶ月の暮らしは出来るだけ充実したモノにしようと僕は心がけた。アルバイトの方も日程を半分にして貰って、出来るだけ彼女のそばに居ることにした。彼女の様態は日に日に悪くなるのが目に見えて分かった。時より見せる笑顔もどことなく弱々しい陰が見えていた。そして彼女は時々言った。

「星治さんは小説を書いて。星治さんの小説は誰よりも面白いわよ、それに小説を書いている星治さんの姿は何よりも素敵だから」

僕は彼女にそう言われながらペンを取るが、ペンの先は何処にも動かない。良いアイデアが浮かんでこないんだ。僕にとって架空の物語よりも現実の彼女の方が気になっていた。けれど彼女は自分の体の事よりも僕の事を気に掛けている様に、いつも僕を励ましてくれていた。

遠い昔、僕がまだ田舎に居た頃の事だ。僕は田んぼや山の中を我が者顔で歩いていた。そこにはカエルや蛇等が居たが、僕はそれらの小動物を平気で殺したことがあった。小さいときは誰もがそうであった様に命の大切さや尊さを知らないモノなのだ。カエル一匹死んだところで僕の日常生活は変わることは無かった。死にかけている蛇を一匹見たところで僕の心は痛んだりしなかった。勿論それは遠く遠い過去の幼い頃の話で、今の話では無い。今の僕はたった一つの命をまるで奇跡をも願うかの様な気持ちで見守っている。日に日に食欲が無くなり、肌は少し浅黒くなり、そして頬骨がハッキリ分かる位に痩せてしまった美紀を見ていると、僕の心は確実に痛みを感じる。この時の僕の気持ちは正直言って早く楽に成って貰いたいのか、それとも一日でも長く生きて貰いたいのか分からなく成っていた。そして本当の最期の晩が訪れた。当然その時の僕にはそれが美紀との最期の晩だという事は分からなかった。

僕はいつもの様に彼女の左隣り寝て彼女の手を握った。そしてその時彼女はふっと言った。

「ねえ、私の夢叶えてくれてありがとうね」

「夢？」

「そう、夢」

彼女は微笑んで話を続けた。

「私ね、いい人と出会って、そしてその人のお嫁さんに成るのが夢だったの」

「いい人・・・」

僕は彼女にとっていい人であり、それと同時に良い夫であったのだろうか……。疑問は薄暗い天井と僕との間の空間の中に消えていく。

「本当は私、今年の冬辺りにね、星治さんと一緒に温泉にでもゆっくりと旅行でもしようと思っていたの。星治さんは少し疲れていたみたいだったから、温泉にゆっくり浸かって疲れをとって貰いたくてね。でもごめんね、私がこんな事になっちゃって」

彼女のその言葉に涙が出そうになったが、グッと堪えて僕は言った。

「な、何言ってるんだよ。まだまだこれからだよ。もうすぐお前の大好きなクリスマスだってやってくるし。そうだ、クリスマスは何処かの一流ホテルで盛大にやって、そして暮れには二人で何処かの温泉にでも行ってゆっくり過ごそう。病気なんて言うのは気の持ちようによってどうにでも成るものなんだよ。だから温泉にでも浸ければ案外治ったりするかもしれないし・・・」

けれど僕の言う言葉は全て現実離れした非現実的な夢の国の言葉だった。

「ありがとう。そうだね、私もがんばらなくちゃね」

「そうだよ、まだまだこれからだよ。まだまだね・・・」

1997年十二月二十日未明彼女は静かに息を引き取った。朝目覚めると冷たくなった彼女の手が僕の手をしっかりと握りしめていた。その感触は今でもしっかり覚えている。痩せてゴツゴツした手でありながら、それでいて優しさのあった手。死にたくなかった事はその手を見ればよく分かった。けれど彼女は確実にこの世を去った。約束したクリスマスも温泉旅行も出来ないままで・・・。

そんな暮れの差し迫った寒い日の彼女の葬儀はしんみりとした中で行われた。横浜の久保山にある葬儀場、そして同じく久保山にある火葬場で彼女は白い灰となった。その葬儀が行われた日はよく雨の降る日だった。骨壺に納められた彼女の遺灰はそんなシトシトと降り続ける雨に何故か似合っていた。悲しみの実感はまだ湧いては来ない、ただその時は漠然とその事実を受け止める事しかできず、まるでどんよりとしたこの空の様な大きなものに包まれている様にしか感じられなかった。けれどクリスマスを経て、暮れを迎えるとそれは絶望的な悲しみに変わっていった。遺灰を前にワイングラスを傾けるクリスマスイブ、そして彼女の写真を持って出かけた温泉旅行。心こそ二人でと言う気持ちがあったけれど、実際は一人ぼっちだった。やっと出会えた僕の理解者、そして最愛の妻美紀はもうこの世には居ないのだ。やっと出会えたと言うのに。温泉から帰って来ると一人ぼっちの八畳の部屋が僕を待っている。二人で居ると少し狭く感じたこの八畳の部屋も今一人ぼっちに成ると広く感じるものだった。今考えれば彼女と二人で遣りたいことは沢山あった。そして彼女に言ってあげたい言葉も沢山あった。けれど今は遺灰に独り言のように語るだけで、その言葉は直ぐに八畳一間の空間の中に消えていく。結局彼女の遺灰は悩んだ末にとりあえず彼女の千葉の実家のお墓に埋葬されることに成った。理由は僕の実家の熊本よりはお墓参りに行きやすいと言う単純な理由だった。勿論僕に再婚の意志は無い、だからもしもこのまま再婚しないで独身のまま死んだとしたら、その後は彼女は熊本の僕と一緒にのお墓に入ることになる。けれど未来は誰にも分からないものなのだ。僕と彼女が出会った時にまさかこんなに早く死別するとは思ってもいなかった様に・・・。

そしてこれから起こる出来事も誰ひとりとして予測できる者は居なかった。その出来事

が起こったのは彼女が死んでから丁度一年後に起こった。

その日は彼女の一周忌を迎える日だった。僕は前の日に喪服をタンスの奥から引っ張り出し、衣紋掛けに掛けて前の日は眠りに就いた。そして彼女の一周忌の日の朝方、僕は不意に目が覚めた。と言っても時計の針はまだ午前の子時を廻ったばかりだったので、目が覚めたと言っても一瞬の事であった。その時ぼんやりとした意識の中で微かな温もりを感じた。フッと横に目を向けるとそこには亡くなったはずの美紀が静かな寝息を立てて眠っている。勿論それは夢の続きの様であり、幻に近いものだった。こここのところ美紀が死んでからの僕は夜眠れずに医者に処方されていた睡眠薬（ホリゾン錠）を飲んでいた為に、中途覚醒される事がたまにあり、現実と夢の区別が分かり難い事は何度かあった。けれどこの時は、普段感じる事の無い温もりを確かに感じた。けれどそんな事まさかと言う意識の方が上回っていたのは当然の事で、僕は幸せの夢の続きを見ることに専念した。朝が来るまでの数時間は僕に唯一の残された安らぎの時間なのかもしれない。それは例え夢でも幻でも構わない、彼女の微かな温もりと懐かしいムスクのコロンの香りを僕は感じながらも一度夢の続きを見ることにした。夢の中の彼女は病気も無く、笑顔があった。僕はそんな彼女にただ謝ることしか出来なかった。もっともっと色々してあげたかった事、もっともっと色々な悩みを聞いてあげたかった事、そしてもっともっと色々な楽しい思い出を二人で作りたいかった事、そんな事を僕は夢の中の元気な彼女に一生懸命謝罪をしていた。そしてそんな彼女もやがて朝日と共にその姿は光の中に消えていき、現実が代わりに僕の前には現れる。時計はけたたましく鳴り出す。それは共に僕を現実に戻す合図でもあった。

僕はけたたましく鳴り続ける目覚まし時計を止める。朝の光は窓の隙間から僕を包み込む。けれど夜中に感じた彼女の温もりと香りは現実の朝でも白いシーツの中に確かにあった。僕はもう一度横に目を向ける。けれどそこには当然彼女の姿は無かった。やっぱり夢だったのか……。僕が感じた率直な気持ちだった。それは何となく淋しい感じだった。夢では美紀に会えた喜びの代わりに、朝の覚醒された世界は完全に一人ぼっちの孤独な現実があった。僕は仕方なく大きな溜め息を付き、布団から出ようとした、その時だった、部屋とダイニングキッチンとの間のドアの向こうからトントントントンと言う単調な音が聞こえてきたのは。

その音は生前美紀がまだ元気だった頃によく聞いていた美紀が朝御飯を作る時に味噌汁の具のネギを切る音に似ていた。でも一体何の音なのだろう？僕はその聞き慣れた音に耳を澄ました。微かに臭う味噌汁の味噌の香り、間違いなくそれは美紀と居た頃の懐かしい生活だった。

「美紀？」

僕は思わず声に出して言ってみた。けれど返事こそ返って来なかったものの、微かに聞

こえる鼻歌は間違いなく美紀のモノだった。僕はもう一度自分の周りを見渡してみた。部屋の中は美紀が死ぬ前から何一つ手を付けず殆ど変わっていなかった。美紀のお気に入りカーテンと絨毯、美紀の洋服が未だに手つかずのタンス、どれ一つとってもあの頃と変わったものは無かった。ただ一つ変わったものと言えば、小さな仏壇が一つタンスの上に美紀の写真と一緒に置かれていた事くらいのものであった。僕はその時フッとその小さな仏壇の所に目をやった。僕の記憶が正しければ、昨晚確かに彼女の写真は立ててあった。けれど今それを見ると写真は伏せて置かれていた。冷静に考えればおかしい事は幾つもあった。けれどそれを現実として受け止められない自分がそこにはいた。夢の続きでも見るのだろうか？僕は自分の頬を軽くつねってみた。痛みは確かに感じる事が出来る。これが夢では無いのなら、残されているのは現実だけだった。現実的に美紀が生きている？それは有り得ない事だ。映画やドラマの世界ならともかく、現実的に一度死んだ人間が生き返る？そんな事があるはずが無い。けれどそんな思いや常識もこれだけの現実的事実が揃えば、何の意味も持たなくなる。夢なら夢でも構わない、例えそれが幻だとしてもそれを僕は受け入れよう。理由や理屈はどうであれ美紀が生きていると言うコトを……。

僕は意を決してベッドから這い出る。トントントントンと言う音は心地良いリズムを刻んで、僕がダイニングキッチンに近づくと、それに合わせる様に段々と大きくて確実な音に変わる。美紀が生前好きだった森高千里の「私がおばさんになっても」の鼻歌も確実に美紀の声だった。僕は少し嬉しい気持ちでキッチンと部屋とを挟むドアの取っ手に手を掛ける。けれど取っ手をひねる事にためらいがあった。勿論美紀に逢いたい気持ちはある。けれどドアを開ける前までは確かなモノだったが、ドアを開けた途端にそれが不確かなモノに変わる事はよくある事だ。ドアの向こうに美紀が待っている保証なんて何処にも無いんだ。昔に何かで言っていたのを覚えているが、お盆の時に死んだはずのお爺さんが帰って来た気配があったと言う手の話だ。確か何かのミステリー特集の番組だったと思う。僕は幽霊や霊界の話にはあまり興味を持たなかったし、時には作り話とすら思っていた。けれど実際自分が体験するとそれはあながち嘘だと一言では言えない気がした。けれど大概のミステリーは二階で居るはずの無い足音がしたから二階に行ってみると誰も居なかったとか、ギターが趣味だった息子が亡くなった後も、夜中にギターを弾く音が聞こえてきたから息子の部屋に行ってみるとやっぱり誰も居ないと言うのが多い。それらの話が実際の話かどうかは別として、もしも霊界とか幽霊が存在するのなら、一周忌の今日美紀が幽霊に成って現れたとしてもおかしくは無い。けれどももしも美紀が幽霊だとしたらもう夜は明けている。朝の強い光は確実に僕の周りを包み込んでいた。とすると摂理にあっていない。イヤそもそも幽霊が存在する事自体が不条理な事なのに、摂理もクソもありはしない。とにかくドアの向こうには人の居る気配がしていることは確かな事なんだ。ただ僕が一番気にしていた事は、僕がドアを開けた瞬間にその確かな存在が無くなるという不安だけだった。僕はもうしばらく様子を見るかそれとも一気に扉を開けるか悩んだ。そして悩んだ末にそのどちらでも無い答えを出すことにした。僕は勇気を出して声を掛ける事にした。

「おおい？」

僕がそう呼びかけると、トントントンと言う音と鼻歌は一瞬にして消えた。僕はしまったと思ったが、既に後の祭りだった。けれどどちらにしる元々無理な話だったんだ、死んだ人間が生き返るなんて事は。けれど僕がそんな諦めたその瞬間に奇跡は起こった。

「あら、もう起きたの？ 今日はやけに早いわね」

その声は紛れもなく生前何度も聞いていた美紀のモノだった。

「えっ、あっ、いや、そうだな。今日は早く目覚めてしまったよ」

僕の返答には不自然さがあったが、美紀は何一つ疑った様子は無かった。

「じゃあ今日は久しぶりに朝御飯一緒に食べられるね」

嬉しそうに言う美紀。そして美紀にそう言われて、生前あまり朝御飯を一緒に食べられなかった事に改めて気付かされる僕。あまりにも現実味を帯びた会話だけに、それは僕にとって非現実過ぎる会話に感じられた。美紀の声を聞いた僕は今度は美紀の顔を見たくなると言う衝動に駆られた。本当に美紀はそこに居るのだろうか？僕は疑問とほぼ同時に取っ手に手を掛けて、その現実と幻とを狭間の扉を勢いよく開けた。そしてそこには確かに妻だった美紀が居た。「あら、どうしたの？ そんな驚いた顔をして」

二人の沈黙を破ったのは美紀の方だった。美紀は生前それもまだ僕等が出会った頃の元気な姿でエプロンを掛けて立っていた。

「あっイヤ、何でもないよ。それより美味しそうだね。今朝の朝飯」

僕は動揺を隠しながらも、差し障りのない言葉を選んで言った。

「何言っているの？ いつもと一緒のベーコンエッグとお味噌汁とご飯じゃないの」

「そうだね、いつもの朝飯だね」

「今日の貴方は何か変よ。何だかまるで幽霊でも見るような顔だし、いつもと同じ朝御飯なのに美味しそうなんて言うのも初めてだし・・・」

「そ、そうか、そんな事ないと思うけど」

僕は慌てるように言ったが、「いいえ、明らかに変よ」

と彼女はそう言い返して来た。確かにそれはそうだろう。一年前に亡くなった彼女が目の前に居るのだから驚かない方がおかしい事だった。けれど僕は出来るだけ平然さを保つように努力をした。

「さあ出来た。朝御飯にしましょう。星治さんはテーブルの上を拭いてくれる」

「ああ、分かったよ」

僕は彼女に言われるままにテーブルの上を軽く拭いた。そして彼女は朝御飯をお盆に乗せて八畳の部屋の中に入って来る。僕は慌てて仏壇の扉を閉めた。幸い彼女はその事に気が付かないようだった。そして朝御飯が全て運ばれると僕等の朝食は始まった。

「いただきます」

笑顔で始める食事の挨拶、それは本当に久しぶりに感じた幸せだった。時折見せる彼女の笑顔は昔と何一つ変わらない笑顔。僕はそんな彼女に笑顔で応える。正直言ってまだ僕

はこの不可思議な状態を全て理解出来ている訳では無い。むしろ理解出来て無い事の方が多かった。けれど理由や常識はどうであれ、この現状に幸せを感じていることだけは事実だった。彼女は時折僕をヒヤッとさせる事を言う。

「ねえ、タンスの上の仏壇どうしたの？ 誰か身内の人亡くなったっけ？」

「あっいや、あれはほらあれだよ。先祖を粗末にするとバチが当たるって言うだろ。だから一応先祖の為にな」

「でも仏壇の前に私の写真置くのは止めてよ。まるで私が死んじゃったみたいじゃないの」

「そ、そうだな。以後気を付けるよ」

彼女は自分が死んだことに全くと言って信じていない、もしくは気付いていない様だった。けれど彼女にそう言われると僕も彼女が死んだことを漠然ではあるが忘れることが出来るような気がした。

「ねえ、今日は誰かの結婚式でもあったっけ？」

彼女は唐突に衣紋掛けに掛かった礼服見て言う。僕はそれが喪服だという事を伏せた。

「あっ、いや、これはこの前結婚式があってそのまま掛けっぱなしにしてあるだけなんだ」

僕の必死の言い訳に対して彼女はそれ以上その事には触れなかった。僕等は久しぶりの朝食をゆっくり味わいながら食べた。食事が終わると彼女は後片付けにまたキッチンに戻って行った。僕はその間、親戚一同に電話を掛けた。

「あっ、義理母（おかあ）さんですか？ 急な話なのですが、今日の一周忌は中止にして貰いたいんですが・・・」

そんな僕の突然の電話と会話の内容で少し驚いたように聞き返して来た。

「えっ、何？ どうして中止なの？ お寺の方も用意してあるのよ。それを今更キャンセルなんて出来ないわよ。でもどうしたの？ 急に中止にして欲しいなんて」

義理の母は少し苛立った様に問いただす。

「理由は聞かないで下さい。とにかく必要無くなったんです。僕の両親には僕の方から連絡して起きますし、お寺の方も僕から連絡して置きますので、今日の所はそう言うことで、本当に急な話で済みません」

義理の母は不服そうだったが、最後には仕方なくと言った感じで諦めてくれた。それから僕は自分の両親とお寺に電話をして、それぞれの事情を説明した。両親もお寺も急にと言う出来事で困惑していたが最後にはどちらも了解してくれた。僕が全ての連絡を済ますと、美紀がキッチンから戻ってきた。

「今日はいい天気ね。こんな日は家でじっとしていただくは無いわね。何処かに遊びに行きたい気分だけど、パートに行かなくちゃいけないね」

彼女はそう言うが、パート先は彼女の様態が悪化してから当然辞めていた。一体今の彼女は何処までの記憶があるのか僕には分からなかった。けれど僕は自然に彼女の会話に合わせる。

「あっそうだ。昨日の夜パート先の店長から電話があってな。今日は暇だからパートは来

なくていいって確かに言ってたよ」

「あらそう。それじゃあ私、今日は自由なのね。でも一体何をしようかしら」

「あっじゃあ、どっかに一緒に行かないか。そうだな、何処か行きたい所ないか？」

「えっ、どうしたの？ 星治さんがそんな事言うのってひょっとして結婚してから初めてじゃない」

僕は彼女に言われて改めて生前の夫の責任不足さを感じさせられた。

「えっ、そうだったっけ。まあほらあれだよ。たまには一緒に羽根でも伸ばそうかと思って」

彼女はしばらく考えた上で遊園地に行きたいとまるで子供の様なはしゃぎ声で言った。

「じゃあ遊園地に行こう！」

そして僕等は朝食を済ませてから、遊園地に出かける支度をする事にした。けれど出かける前に僕には確かめなければいけない事がある。それは彼女自身が実際に存在をしているのかどうかと言う事を確かめる事だった。彼女は出かける用意をする為に鏡の前で化粧をし始めた。僕はそんな彼女の後ろに立って、軽く彼女の肩に触れてみた。そこには確かな感触があった。けれどそれだけではまだ確信とは呼べない。僕の手は彼女の手元に伸びていく。化粧をする彼女の手はまるで透けている様に白い。僕は彼女のその今にも透けて消えて無くなりそうな手をそっと握った。表面はさっきまで水洗いをしていたので冷たかったが、温もりと感触は確かに存在していた。

「あらどうしたの？」

彼女はそんな不振な行動を取る僕に言った。

「あっいや、何でもないよ。ただ化粧でも手伝おうかなと思って」

「あら珍しい。星治さんがそんなに優しくしてくれるなんて、雪でも降らなきゃいいんだけど」

彼女はそう言って部屋の小さな窓から外を覗き込んだ。外は彼女の言葉とは正反対に雲一つ無い良い天気だった。僕等は美紀の化粧を済ませると出かける支度をする事にした。幸い彼女のタンスの中身は生前と同じ状態にしてあったから、彼女の洋服選びには何の支障もなかった。彼女はピンクのワンピースにカーデガンを羽織り、その上から薄いクリーム色のピーコートを着込んだ。僕はブルージーンズにチャンピオンのトレーナーとB-1のジャンパーを着る。そして二人は一緒に外に出た。

部屋の外は冬と言う事もあってかなり冷え込んでいたが、僕にとっては一度死んだ妻ともう一度腕を組んで歩いていると言う実感の方があまりにも強すぎて、そんな外の寒さを殆ど感じるコトは無かった。久しぶりに二人で腕を組んで歩く横浜の伊勢佐木モールはいつもの見慣れた伊勢佐木モールとは明らかに違う街並みに見えた。まだ朝の八時を回ったばかりだから、商店街はまだ静けさがあった。元々伊勢佐木町と言う街は夜の街であって、メインは夜にあった。だから朝の伊勢佐木町はどちらかと言うと、夜の煌びやかさとは打って変わって醜さや静けさがある。昨晚に吐き捨てられた汚物が街の所々にあったり、無

造作に捨てられたゴミが更にそんな街を汚くしていた。そんな街も商店街が始まり出す十時を過ぎだすと活気を持ち始め、汚物もゴミも見えなくなる。けれどそれは目先の煌びやかさや勢いに紛れるだけで、消える訳では無い。それらは永遠に消える事は無く、目を閉じればいつでもそこにある。けれどそんな街に何年も過ごしていると、段々それが見えにくくなり、やがてその中に埋もれて行く。僕がドラッグに染まり墜ちて行ったあの頃の様に・・・。

僕と美紀はそんな街の中をJRの関内駅に向かって歩いて行く。平日の朝の伊勢佐木モールには人が殆どいなかった。これが夏ならば終電に乗り遅れたサラリーマンや若者の姿が所々に目に付くが、冬場はそんなサラリーマンや若者も外で寒い夜を過ごすのでは無く、何処かのビジネスホテルや朝まで遣っている飲み屋やカラオケ屋に逃げ込むのが殆どだった。だから必然的に寒い朝に商店街に居る人間は少ないものなのだった。けれどそんな同じ関内でも裏と表ではまた大きく違う。伊勢佐木町がある方が裏だとすれば、官庁街側は表なのだろう。裏には人が殆ど居ないのに対して、表の官庁街は朝の八時とも成れば今まで一体何処にこんなにも人が居たんだろうと思う程の人の波が出来始める。勿論それは殆どが役所や官公庁やビジネス街に向かう人の波だった。関内駅に近づくとその異様な熱気が僕等を取り巻く、僕等はその波に逆らうように駅の構内に入る。ホームは横浜方面の方にはそれ程人は居ない。僕等はその閑散としたホームで電車が来るのをひたすら待っていた。電車は僕等がホームに入ってから五分ほどで構内に滑るように入ってくる。車内は閑散としたホームとは打って変わって人が立つスペースも無いくらいにごった返していた。列車のドアが開くとそのごった返した人の三分の一位は関内のホームに降りたが、それでも車内は立っているのが精一杯と言う位の人が乗り続けていた。僕等はそんな車内のほんの少し空いたスペースに体を委ねることにした。けれどそんなごった返した人混みも横浜駅を過ぎると一気に減り、座るスペースも出来るようになった。僕等は偶然空いたそのスペースに腰を下ろした。彼女が現実世界でも存在すると言うのは席を見れば分かる事だった。立っている人が増えてきても僕の隣の席には誰も座ろうとしない。それは彼女が他の人にも見えていて、この世に確かに存在している証でもあった

～夢なら夢でも良い 現実なら現実でも良い だからもう僕の傍から離れないでね
だって今の僕には君が居てくれなきゃ何も出来なくなってしまいそうだから・・・～

目的地の遊園地には1時間ばかりで着いた。遊園地内は平日と言う事もあって空(す)いている方だった。僕はとりあえず入場券を二枚買って一枚を美紀に手渡した。美紀は子供の様にはしゃいでいる様子でその券を大切に両手でしっかりと受け取った。そして僕らは二人で並んで遊園地の中に入っていった。

最近の遊園地は（ディズニーランドは別として）殺風景なモノだった。乗り物こそ賑やかさがあるけれど、ディズニーランドの様な独特の世界感は全く無くただ人工的の乗り物だけが動いていると言う機械的な感じだった。僕は美紀にとりあえず何に乗りたいか聞いてみた。

「何から乗ろうか？ 美紀が乗りたいモノはなに？」

美紀はちょっと驚いた様子で僕に聞き返した。

「今私の名前言ったよね？ なんだか結婚する前の時みたいな感じがした。だって星治さん結婚してから一度も私のコト名前で読んでくれなかったのよ。いつも、おいとかお前とかしか呼んでくれなかったからちょっぴりなんだか嬉しいなあ」

美紀にそう言われて、初めて僕は確かに結婚してから名前で呼ぶことは殆ど無かったなあと思わざるを得なかった。けれど名前で呼ばれるのがこんなにも喜ばれる事ですらある事に、あのおくせくした日々の中では忘れかけていたような気がした。

「そんなに嬉しいんだったらこれからは毎日名前で呼ぶよ」

それを聞いて彼女はちょっと照れくさそうに「うん」と小さく、そして嬉しそうにうなずいた。それから僕たちはジェットコースターに乗る事にした。ジェットコースターに並んでいるカップルはみんな手を繋いでいたので僕も美紀と手を繋いだ。けれど美紀はまた僕に質問をしてきた。

「手繋ぐのって何年ぶりかな？ 付き合っていた頃にはよく手を繋いでくれたけれど結婚してからは手を繋いでくれなかったよね。でも私思ったの、やっぱりスキンシップって大切な事なんだよね。だってやっぱり手を繋いでくれると嬉しいものだから」

それを聞いて僕は一体今まで自分は何を美紀の為にしてあげられたのだろうか？ 結婚するまではそれなりの事はしてあげられたけれど、結婚後は男（夫）として何一つして妻を喜ばす事をしてあげていなかった様な気がした。

美紀はいつも大きな幸せを望んでいた訳じゃ無い。美紀はいつだって小さな幸せをただ望んでいただけだった。例えばお互いがお爺さんお婆さんに成っても手を繋いで散歩したりとか、そう言う何処にでもある小さな幸せを望んでいただけだ。けれどそのどれ一つとっても美紀の理想の私生活は与えてあげられてなかった。僕は自分の愚かさにつくづく自己嫌悪してしまう。僕は美紀の手を二度と離さない、離したくないと言う気持ちでしっかりと握り締めた。それから僕らはジェットコースターに乗った。久しぶりに感じる興奮感懐かしい思い出となっていた。横には美紀が楽しそうにはしゃいでいる。昔はデートでよく来たが、結婚してからは一度も来ていなかった。結婚してからは美紀がこんなにも遊園地が好きだなんて思っていなかった。きっと僕は夫として最低だったのかもしれない。好きな妻を喜ばす事も出来ずに、ただただ現実的な日常の生活に追われて遊園地どころかデートにすらも誘っていなかった。

～僕らの乗るジェットコースターは風になって突き進む 過去も未来も置き去りにして

僕らに乗るジェットコースターは風になって突き進む 夢も希望も置き去りにして
そして僕らの乗るジェットコースターは風となって突き進む
先に繋がる確かなモノも分からずに不安だけを抱えた僕を置き去りにしたままに・・・

僕らは幾つかのアトラクションに乗って昼ごはんを食べる事にした。そして僕らは近くの売店でサンドイッチを食べる事にした。

「ごめんね、遊園地に来るのがもうちょっと早く知っていればお弁当作ってきてあげられたのに、急に遊園地に行こうなんて星治さんがいうからお弁当の用意もして来られなかった。だけどせめて魔法瓶に温かいお茶位は持ってくれば良かったね」と言いながら微笑む美紀。

僕は半日過ぎた今でもまだ理解出来なかった。何故美紀がここに居るのだろうか？ 確かに美紀は一年前にこの世を去った。それは間違いない。そしてもしもこれが夢や幻だったとしたならばこんなに長時間見ている事や手に触れる事の出来る感触には当然実感は無いはず。なのに美紀はたしかにここに居る。それも生きていた時よりも元気な姿でいる。もしもこれが俗に言う幽霊だったとしたのならば、納得が行く。けれど幽霊なんて信じられない。それならば幻覚なのだろうか？ でもこれが僕だけの幻覚だったとしたら電車の席の件や入園券の二人分のチケット等の意味が分からなくなる。だから少なくとも理由はどうであれ美紀は今現在ここに居て現実世界の中の確かな存在としてあった。それは今の僕にとっては安心感だったが、それと同時に美紀は一体いつまでこの世に居るのだろうか？ 今日いっぱい？ それとも今週いっぱい？ それとも一生このまま僕の傍に居てくれれば良いのにとさえ僕は思う。美紀が死んでから色々な女性を見てきたけれど、美紀以上に僕を理解してくれる女性は少なくとも居なかった。だから僕はこの一年間で誰ともお付き合いはして居なかったし、する気も起きなかった。

美紀の笑顔は誰よりも美しかった。美紀の声は誰よりも美しかった。一体何故美紀は死んでしまったのだろうか？ 散々悪いことをして来たこの僕がこの世を去らずに生き残り、純真無垢で健気に頑張っていて必死に生きようとしていた彼女が死んでしまうなんて、なんて運命とは不平等なモノののだろうか？ でも今サンドイッチを美味しそうにほおばっている美紀を見ていると神様が間違えて美紀を死なせてしまって、それが間違いだったので生き返らしてくれたのでは無いかと思えてしまう。それとも双子の姉か妹がいて今日だけ美紀に成り代わってくれているんじゃないかと思えてしまう。でも双子の姉妹なんて美紀には居ない。そこに居るのは正真正銘僕が心から愛した美紀以外の何者でもなかった。

サンドイッチはすっかり無くなり僕はやはり売店で買ったホットコーヒーをすすった。けれど僕の顔には喜びと同時に不安がやっぱりあったのだろう。美紀はそんな僕に気付き話しかけて来た。

「星治さんどうしたの？ なんか心配事でもあるの？ なんか不安そうな顔しているよ」
そんな心配そうに僕を見つめる美紀に僕は言った

「心配事なんて無いよ。今日は楽しいし、本当に久しぶりに楽しい気分だよ」

「ホント？ なら良かった、それじゃ私も嬉しいな。星治さんが楽しいんだったら私も楽しいよ」

それから僕達は幾つかのアトラクションに乗って更にその楽しみを満喫した。けれど夢の様な時間はあっという間に過ぎて行くものなのだ。悲しいけれど僕の充実している時間的な概念は何も変わらず、いつもと同じ様にあっという間に過ぎてしまうモノだった。

「そろそろ帰ろうか？」

そう切り出したのは美紀の方からだった。

「えっもう帰るの？ もっと遊んでから帰ろうよ。だってまだ15時だよ。まだ帰らなくても良いんじゃない？」

僕は慌てるように言った。

「でも夕食の支度が、冷蔵庫の中も空に近かったから、食材も買出しして置かないといけないし・・・」

僕はそんな美紀に言った

「今夜は外で食事しよう。それも美紀の一番好きな料理にしよう。美紀は今一体何が食べたい？」

その答えに美紀はまた不思議そうに言った。

「外で食べるなんて何年ぶりだろう。結婚してから一度も外食して無かったよね。なんか今日は特別な日みたいだね。突然遊園地に行ったり急に外で食事しようって言ったり。今日は特別な何かあったけ？」

まさか自分の命日だとは気が付かない美紀にしてみれば、それは当たり前の疑問だった。「あっいや特に何も無いけど、でもたまにはそういう日があっても良いだろうと思ってだよ。美紀もたまには外食でもしたいんじゃないかなって思って」

その言葉を聞いて美紀は嬉しそうに答えた

「そうだね。たまには外食も良いかもね。今まで美味しい物あまり食べてなかったし、たまには自分の好きな物食べても良いんだよね。今まで病気で好きな物食べて無かったけれど本当にたまには好きな物食べなきゃ、かえって身体に良くないものね」

僕はそんな会話の中で美紀が一体どのくらいの状態の頃の頃に生き返ったのか検討もつかなかった。見た感じでは僕と初めて会った時の様にも見える。少なくとも死ぬ直前のガリガリに痩せ細った頃では無かった。だとしたら何歳位の頃なのだろうか？ それとも見た目や外見は変らなくても心の中は実は死ぬ直前なのかもしれないと思った。確かに彼女は死ぬ3ヶ月位前から自分の好きな物を食べて無いはずだ。病院に入院していた時もそして我が家に戻って来た時も。彼女は病院で言われた食事制限を忠実に守った。けれど結局はその甲斐も無く死んだ。病院も手の付け様が無かったのだろう。だからそれは誰のせいでも無く、誰も悪くもない。しいて言えば僕が彼女の身体をもうちょっと労わってあげれば良かったのかもしれない。そうすれば彼女の癌が早期発見で、もしかしたら今も本当にこ

の様に元気で過ごせたのかもしれない。でも彼女は確実に一度死んだ。そして何故かまたこうしてもう一度生き返った。勿論理由や原因は分からないままに・・・。

～微笑む君 それを見ている僕 幸せだったあの頃 何もかもが自由だったね
もう二度と離したくない幸せ でも時は無常にも過ぎていく
それはあの日のあの時に止まらずに零れ落ち続けた涙の様に・・・～

彼女は色々考えた末にランドマークタワーのレストランに行きたいと言った。そこは僕達が正式に交際をしてからの初めてデートをした時のお店だった。

「でもあそこ確か結構良い値段するけれど大丈夫？」

それは彼女が僕の懐の事を心配しての発言だった。

確かにお金は無かったがクレジットカードが有った。取り敢えずカードさえ使えば返済の事を心配しなければ幾らだって使える。確かに僕には返済するにはギリギリの経済状態だった。彼女が死んでからも僕は貧しい夢見る作家である事には間違い無かった。自主出版する本はことごとく売れなかった。だから僕はお金を貯めては自主出版と言う形式を取っていた。けれどそんな生活も一年後には借金の山と成っていた。僕は妻（美紀）を亡くしてからの生活はやはり荒んだモノに成っていた。バーの店長に昇格したが店長と言えば聞こえは良いものだがただの雇われ店長であって、手当てとして給料が数万円多くもらえただけの事だった。そんな暮らしが当たり前のように成ってきた今、僕は美紀と再び会って自分の荒んだ生活を見つめ直す良い機会かもしれないと思えた。

「お金の心配なんてしなくて良いよ。たまには美味しい料理でも食べて満喫しようよ」

僕はお金より大切なモノを知っている。だけど結婚してからはずっと彼女（美紀）に頼っていた気がした。美紀さえ居れば普通の生活が出来ると信じていた。けれどそんな大切な美紀に何一つ幸せな事をしてあげられなかった悔しい程の悲しい現実があった。

僕らは遊園地を後にして横浜のランドマークタワーのレストランを目指す事にした。

帰りの電車はまだラッシュアワーには早すぎたせいか二人で座席に並んで座る事が出来た。僕等が横浜の桜木町に着いたには4時半過ぎだった。ランドマークへと続く動く歩道は買い物帰りの人で反対側は混んでいたが、僕等の方向は人が4、5人居るだけだった。食事をするにはちょっと早い時間だったけれど、僕達はレストランに向かった。まだ人も少なかったせいもあって窓側の景色の良い場所に座れた。窓際に写る夕焼けは僕等には温かく感じられた。もう街はクリスマス一色と言った感じで色々なイルミネーションが輝いていた。僕等は食前酒に赤ワインを注文しそして料理は値段として多少高いがAコースを思い切って注文した。美紀は無償に喜んでいたがそんな顔を見る事さえ結婚して以来見ていなかった顔だった事に改めて気付く。そして食前酒がワイングラスに注がれる。でも一体何に乾杯すれば良いのだろうか？ 結婚してから一度も二人だけで乾杯した事なんて無かった。だから一体何に乾杯すれば良いのか分からなかった。

「ねえ何に乾杯する？」

やはり美紀も何に乾杯するのか迷っている様だった。僕は取り敢えず今日と言う日に乾杯しようじゃないかと言った。そしたら美紀もそれに同意するかの様に

「じゃあ今日と言う日に乾杯しましょう」と言って応えた。

そして二人は今日と言う日に乾杯をした。けれど僕にとっては複雑だった。今日は確かに美紀が目の前に居る。けれど明日も居る保障は何処にも無い。今日だけが特別で明日からはまた何も無い日が続く可能性だってある。そう考えると切なさや不安が心を支配していく。でもそんな僕の心の迷いとは関係なく美味しそうな豪華な料理は次々と運ばれて来る。僕はしっかりとその料理を食べたが正直味は殆ど分からなかった。そんな僕とは对象的に美紀は美味しいねって本当に美味しそうに運ばれて来る料理を食べきった。

僕等が料理を食べ終えた頃には夕焼け空も終わり街中クリスマスのイルミネーションに包まれて賑やかで煌びやかな夜の街を醸し出していた。僕等は食事代をカード払いで済ませ、クリスマス一色に染められたイルミネーションに彩られた夜の街に出たが、正直何処を見てもカップルでいっぱいだった。結婚前のいつものデートのパタンではこの後飲みに行ってホテルで愛を確かめ合うパタンが多かった。けれど今夜は僕が店長を務める自分の店(ブルーバード)には行きづらかった。店員も僕の妻の死を知っている。だから今の妻を見せる訳には行かない。もしも連れて行ったらパニックの元になる。彼女が今日生きていると言うのは今のところ僕だけの秘密ごと。誰かに知られたらどうになってしまうのだろうか？ それ以前に彼女自身が自分の死に気が付いてそのまま成仏して消えてしまうかもしれないし、運が良く奇跡のような出来事が起これば、死んだ事自体の事実がなく成って一生彼女は生きて行くコトが出来るのかもしれない。けれどそれは大きな賭けの様なモノだ。僕は正直一秒でも彼女と一緒に居たいのが本音だった。だから僕は危険を出来るだけ犯したくない。だから今日はブルーバードには寄らない事に決めた。

「お腹もいっぱいになったし家に帰ろうか？」

彼女は僕の心配を察したのか、そう言って来た。

「そうだね。もうちょっと夜の街を彷徨いたいけれど寒くなって来たし、そろそろ我が家に帰って、そして家でゆっくり二人だけで過ごそうか？」

「でも星治さんは仕事なんですよ。今夜もまた一人ぼっちの夜を過ごさなきゃならないのかな・・・」

美紀は淋しそうにそう呟いた。僕はそんな淋しそうな美紀に笑って答えた。

「実は今日は休みを取ってあるんだよ。だから今夜は朝までずっと一緒だよ」

「でも今は稼ぎ時じゃなかったっけ。年末の忘年会シーズンだよ。クリスマスも近いし、そんな時に仕事休んで大丈夫なの？」

「ああ店長の特権で休みたい時に休めるんだ」

「店長？ いつ星治さん店長に成ったの？ 私知らなかったよ。店長に成ったんなら店長に成ったって教えてくれなきゃ。店長の昇格祝いもしてあげたかったのに」

確かに美紀の言う通りだ。でも僕が店長に成ったのは美紀が死んでから半年が経った頃だった。だから美紀に伝える事は出来なかった。

「ごめん言い忘れていたみたいだね。でも店長と言っても雇われ店長だから、そんなお祝いなんていいよ。それに長く働いていれば誰だって成れるんだから」

「でも店長なんて凄いや。長くたって店長は一人しか成れないんだし、是非お祝いしたいわ」

「そんなに店長昇格のお祝いしたいなら家に帰ってゆっくり二人だけでお祝いしようよ。それに今日はブルーバードに行きたい気分じゃないから」

「そうね。それなら家に帰ってお祝いしましょう。何かワインかシャンパンでも買って帰る？ 何も飲まないで乾杯は出来ないからね」

結局僕等は近くの酒屋でシャンパンを買って帰る事にした。家に着くと1DKの部屋は少し狭く感じたが、懐かしい感じもした。そして二人はクリスマスツリーも無いシンプルな部屋でシャンパンで乾杯をした。

今思い起こせばこんな家庭が理想的だと思っていた。豪華じゃなくて良い、ただ美紀が居て僕が居る、そして部屋にはいつも温かい雰囲気漂っているだけの関係が望ましかった。でも仕事、仕事で追われてそんな当たり前の暮らしも出来なかった。けれど今さらだけどもお金がそんなに大切だったのだろうか？ 確かにお金が無ければ生活は出来ないし夢だった本の出版も出来ない。けれどそれがどうしたと言う事なんだ。美紀が居なければ夢だって生活だって充実する事なんて出来ない。僕には美紀が必要だったしお金なんかよりももっと大切なモノだった。シャンパンで少し酔っ払った僕は美紀に気を許したのだろうか？ この不思議な今日の全てを告白していた。

「僕には本当に美紀が必要だったんだ。君が居なくなっからの僕の人生なんて無いも同然だった。美紀が死んでから僕は生きる希望を失ったんだよ。でも今日希望が持てた。たいした事は出来なかったけれど、今日は本当に幸せだったし、今まで美紀に当たり前の幸せさえ与えてあげられなかった事が良く分かったよ。でもこれからは違う。僕は良い旦那になるよ。約束する。だからお願いしたいんだ。ねえ美紀。君は一生僕の傍に居て欲しいんだ」

美紀はその言葉を聞いているのかいないのか分からずにただ黙って聞いてくれた。けれど美紀は一度死んでいる。だからこの夢の様な生活が長く続くモノではない事は僕が一番分かっていた。そして僕の話最後まで聞いて美紀はゆっくり冷静に答えた。

「あのね、星治さん私は実は宇宙人なの。今日を境に宇宙に帰らないといけないの。今まで隠していてごめんなさい。私は今日宇宙に帰るけれど星治さんとの事絶対忘れないよ。だからごめんなさい。人間で居られるのは実は今日が最後なの。本当は一年前に宇宙に帰る予定だったのだけど、まだ星治さんと遣り残した事があったから宇宙に帰るのを一年延ばしてもらったの、でも本当に今日が最後なの。ごめんね騙していた訳じゃ無いけどこれが私の最後のお願いだったのよ。でも今夜の12時になったら私は本当に居なくなるの、

本当はこの話も言っちゃいけない事だったけれど星治さんに黙って旅立つ事なんて私はやっぱり出来ない。だから宇宙の掟に背くけれど、でも私は決して死ぬわけじゃなくて、星に旅立つだけ、そしてその星ですっと星治さんを見守り続けるわ。だから私は死んだわけじゃなくて、星に戻っただけだから、星治さんはこれからを大切に生きて欲しいの、それが私の最後のお願いなのよ」

美紀は自分が宇宙人だと言った。勿論それをまともに信じる事は出来ない、でも一度死んだ人間が生き返ったと言う奇跡を目の当たりにすると信じられなかった事も、信じられる要素になる。でも今夜で完全に美紀と言う名前の女性はこの地上から消えて無くなる。それは事実のようだ。でも美紀が本当に宇宙人なら辻褃が合う。僕はそんな美紀に一体何と言ってあげれば良いのか分からなかった。

「美紀？ 本当に君は宇宙人なのか？ 一年前に君は確かに死んだ。そして一年経った今日君は生き返った。そして今日と言う一日を僕と確かに過ごした。僕は未だに今日の出来事が理解出来ない。でも君がもし本当に宇宙人だとすれば辻褃が合う。でも本当に今日しか君はこの世界に居られないのか？ 後一週間、いや2, 3日でも良い。もう少しこの世界に居られないのか？ 僕は君に生きている間に何もしてあげられなかった様な気が今日改めて知った。だからせめてその償いをしたいだ」

でも美紀はゆっくり首を振った。

「ごめんね。これは今日いっぱいなの、私がこの現実の世界に居られるのは。本当は今日だって無理だったんだけど神様にお願いしてせめて今日いっぱいだけ星治さんと会う約束をしてきたのよ。だって星治さんがあまりにも可哀想過ぎたので、私は今日だけでも良いから生前の美紀の姿で星治さんと合わせて貰ったのよ。本当は自分が宇宙人と言う事も言っちゃいけなかったんだけど、でも星治さんにはちゃんとさよなら言わなきゃいけない気がして言っちゃった。だからきっと私はもう今の姿ではこの世界に居られないの。でもね今日一日で十分幸せだったよ。まるで昔付き合い初めのカップルの時みたいでホント楽しかった。だから私は幸せのままこの世界から消える事が出来るの。だから本当に今日はありがとうね。私は幸せのまま宇宙（違う世界）に帰れるよ。だから本当に今までありがとう。そして今度こそ本当にさようなら・・・」

美紀はそう言ったが、本当に美紀は幸せだったのだから？ 美紀と結婚して美紀に本当の幸せの意味を僕は教えてあげる事が出来たのだから？ そんな僕の心は複雑だった。でも美紀は確かにこの世（世界）から居なくなるらしい。それもこの世界に居られるのもほんの後数時間だけだった。僕は一体何をしてあげれば良いのだから？ 残された時間は一分、一秒が無駄に過ぎて行く。僕は一体最後に何をして欲しいか美紀に聞いてみた。

「なあ美紀？ 僕は美紀に一体何をしてあげれば良いんだ？ 美紀はどうすれば幸せにこの世界を旅立てるんだ？ 何でも願いは聞くよ。だから最後のお願いを聞いて叶えてあげたいんだ」

僕はそう美紀に尋ねてみた。そしたら美紀は少しも考えずに答えた。

「私を抱いて。心の底から私だけの事を愛して抱いて欲しいの。私の胸は今両方あるの、だから私の全てを愛して抱いて欲しいの。私の最後のお願い聞いてくれる？ 私は星治さんに美紀と言う女性だったありのままの姿で抱かれたままこの世界を旅立ちたいの。だからお願いはただ一つだけ。私を星治さんの優しさと愛に包まれながら旅立たせて欲しいの」

美紀の目は真剣だった。僕は真顔の美紀を抱き寄せてそして無言でキスを交わした。僕の手は美紀の膨らんだ胸を揉んでいる。今まで無かったはずの右の胸は確かに今はあった。僕は優しくキスをした後。美紀の服を脱がし始めた。カーデガンを脱がしピンクのワンピースを脱がし始めた。徐々に脱がされて行く洋服はまるで彼女の身を守る鎧の様だった。ブラジャーとパンティーだけになった彼女は少し震えている様子にも感じられた。もしかしたら僕が聞くと彼女は頷いた。彼女の身体は乳がん前の身体と言う事だけじゃなくて、まだ男性を知らない少女（処女）の頃の身体だった。勿論僕等が知り合った時に彼女は既に処女じゃなかった。そして僕は処女を抱くのは初めての経験だった。僕は取り敢えず彼女の痛がらない様に愛撫をしっかりとる事にした。唇から耳を愛撫し首筋を愛撫しブラジャーを外し胸を愛撫した。彼女の立った乳首はピンク色をしていてまだ経験が少ない少女の様だった。僕は優しくその両方の乳首を吸ってそして舌先で転がした。彼女の喘ぎ声が微かに聞こえて来る。僕の手は彼女のパンティーの上から彼女のアソコを優しく撫でてみた。そしたら彼女はピクンと反応した。確かに彼女のアソコは濡れていた。それはパンティーの上からもしっかりと確認できた。僕はその確認が終わると彼女のパンティーを優しく脱がせた。そして全裸になった彼女はまだ十代位の女の子の様な身体付きをしていた。

～汚れ切った僕　そしてまだ汚れも知らぬ君

僕等が交わす言葉や優しさは無意味のように風の中に消えていく

心より体を求め合う二人　だけど今の僕等は本当は知っていた

人の身体の温もりは心の触れ合いと何一つ変わらずに　僕等の心を洗い　そして癒し

そしてそれは僕等の荒んだ寂しい心を包み込む優しさだと言うコトに・・・～

僕は年がいも無く夢中になった。彼女を必死に愛した。これでもかと言う程彼女と夢中になった。まるで今まであくせくとした日々を追われて、忘れ掛けていた愛や幸せを確かめ合うように・・・。

きっとそれは僕の人生の中で一番夢中になれたコトだった。受験勉強？　ドラッグ？　執筆活動？　そんなモノなんか全て吹っ飛ばす程の無我夢中になれたモノ。それが今彼女を心から激しく愛するコトだった。もしかすればそれはもう一生忘れるコトの出来ない程の思い出に変えたかったのかも知れない。この経験や体験と言う思い出だけで僕は一生分の生きる糧を得たかったのかも知れなかった。常識とか理性と言うモノは今日の非現実的な出来事で全ては無意味なモノだった。今の僕に出来る事、いや今と言う以前に僕が一生掛けても出来る事。それは美紀を心から愛するコトだった。僕等は我や時間も忘れて夢

中になった。

けれど悲しいコトに現実的な時間は刻一刻と過ぎて行く、まるで僕等の気持ちとは関係なく残酷に過ぎるほどのそれは現実だった。

美紀は言った。

「これでもう思い残すことなく星に帰れるわ」と。

でもその言葉は残される僕としては余りにも切なく悲しい言葉だった。だから僕はそんな美紀に尋ねてみた。

「なぁ美紀。お前は星に帰ると言っていたね。もしも願いが叶うのなら僕もその星と一緒に連れてってこないかな？」

けれど僕は知っていた。そんな僕の願いが余りにも馬鹿げているコトに。だけど僕は本気でそう思っていた。一年前に僕は確かに美紀を一度は失った。けれど奇跡か偶然か美紀は一年後に一日限りの黄泉（よみ）がえりをした。二度はもう僕には余りにも受け止める事は無理そうだった。まさに二度とはもう失いたくない。そんな気持ちしかなかった。それでももしもまた失うのなら、今度は僕も連れてって欲しい、全ての現実を置き去りにしたままで・・・。

だけど勿論と言うか当然と言うか美紀は首を縦に頷くコトは無かった。そしてまた、やはりと言うべきか、美紀は首を横に振って「星治さん。それは無理なの。星治さんを連れて行くコトは出来ないのよ。本当はこうして私が星に帰る前に星治さん会うコトだって無理の事だったのよ。だけど私小さい時からおねだりとか全然していない子だったので、神様が最後の最期のお願いを聞いてもらったの。そして今日だけの約束で星治さんとちゃんとした形で再会出来たの。でも本当は私星に行く前にやり忘れたコトがあってそれをしにこの世に一日の復帰をしたのに、でも私は想像も出来なかった程の幸せを逆に貰っちゃって肝心なやり忘れていたコトをまだしてなったのよ」

「やり忘れていたコト？」

「そうやり忘れていたコト。それは私のタンスの一番下の引き出しの奥に通帳があるんだけど、それを星治さんに言い忘れてしまって。本当は私が学生時代から患った癌が無ければ普通に生命保険とか入れたんだけど、こんな体だったからそれはごめんね」

美紀の言いたいことはなんとなく分かった。けれどそんな美紀が必死に貯めたであろう預金なんて今の僕にはどうでもいい事だった。きっと例えそれを僕が発見出来たとしてもきっと使えなかつただろうし、仮に使ったとしても先に繋がるモノにはならず、その日暮の生活費に充てるだけで、僕の心を救うモノでは無かった。それよりも僕は美紀の方がお金なんかよりもずっと大切に、そして僕の生きる糧だった。だから僕は素直にその気持ちを美紀に伝えた。

「しっかり者の美紀だから、数少なかった生活費の中でも必死に貯めたお金があるんだろう？ でもね僕にはそのお金は必要ないよ。そんな事より美紀の方が何倍も何十倍も大切

なんだ。きっと僕はそのお金は使わないだろうし、美紀と過ごした確かな証として一生それは美紀の形見として取って置くよ」

けれど美紀はそれを否定するかのようにつづけた。

「違うの星治さん。これから私が話す話をよおく聞いてね。実は私星治さんの文才はとっても心情的で心の葛藤や詩的表現を施していて、とても良いモノだと思ったわ。だけど星治さんの作品はこの今の日本では中々分かって貰えないと思って、私が学生時代に学んでいたフランス語で直訳してフランス語で、実は密かに海外（フランス）の出版社に投稿してみたの、勿論作者は星治さんで直訳は私の名でね。そしたらフランスのとある出版社が目をつけてくれて、フランスで出版してくれると言う話で星治さんには内緒で契約をしてしまったの。それを星治さんに言わなかったのはごめんなさい。もしも駄目だったらと言う事も考えて私だけで勝手に取引を試してみたの。そしてね、もしもそれが上手く言ったらちゃんとした形で星治さんに報告して、二人でお祝いしようと・・・」

正直その話を美紀から聞いた時、僕の中では驚きはあった。けれど美紀のそこまで僕の作品に対しての献身的な努力がとても嬉しかった。それは素直に「ありがとう」の一言に尽きた。だけどきっと上手くなるとは思わなかったのだからって思っていた。

「それで私が去年一度死んだ後に実はフランスの方で売れたのよ。だから私の通帳を持って銀行に行けば、その契約金と印税が入っているのよ。そして印税に限ってはまだまだ売れ続ける限り毎月入ってくるのよ。ちなみにフランスのフォッチャと言う出版会社で、そして担当の方はジャン・ツイストと言う方なの電話は・・・・。詳しい事は通帳と一緒に挟んであるから、だから星治さんは私が今夜居なくなったら、それを手に明日銀行とそのフランスの出版会社に電話すれば、全て上手く行くのよ。私が生き返ったのは奇跡のようなコトだけど、でも星治さんの書いた小説がフランスを中心にヨーロッパで売れて居るのは、偶然でも奇跡でも無く、事実の事なの。駄目もとで送った私でさえ驚くような事実なの。この私が今日だけ生き返った事よりも驚く程の事実なのよ」

確かに美紀はそう言った。けれど僕にはそれが事実なのかハッキリとした感覚が無かった。と言うよりもそれが仮に事実だととしても、今夜で何よりも大切な美紀を僕は失う事実の方が何十倍も、いや何百倍もの辛い事実だった。

「確かに君の言っているコトが事実だととしても、それ以前に僕は君を失う事実の方がこの今の僕には辛過ぎるんだ。だから僕も一緒に」そう言い掛けた僕の口を塞いで、美紀は今度は少しきつい口調で僕に言った。

「ねえ星治さん。分かって！！ 人は誰もが必ずその日が来るのよ。それがたまたま私は人より早かっただけなの。それで一人取り残されてしまう星治さんの気持ちは痛い程私は分かるわ。けどもしも本当に私のコトが大切ならば、星治さんは私の分まで生きて欲しいの。それに星治さんと私との生きて愛し合った証の子供は授かれなかったけれど、でも私と星治さんの愛し合って生きた証のモノは、その本よ。だって作者が星治さんで、フランス語に直訳したのは掛け替えも無く私なのよ。それは二人で成し遂げた証の一つのモノ

よ。そしてそれは私達の知らない所(海外)で確実に生きているのよ。だから星治さん！！
もしも私のコトが本当に大切ならば、それを資金に本を書き続けて行って欲しいの。私は
星治さん本の中でこれからも生きるわ。星治さんの描くヒロインとして星治さんが書き続
ける限り生きるわ。そして私はずっと待っているから。星治さんが全てを全うし、そして
いつか私と同じ星に来るまで私はずっと星治さんだけを想って待ち続けているから、だか
ら星治さんは私の為にも、そして何より自分の為に、沢山の作品を書いて欲しいの。それ
が私がこの世に残して来た気持ちだったのよ。ねえ星治さん、私のコト好き？」

勿論好きだ。けれど今美紀が僕に聞いている好きと言うのは、恋愛の感情的な好きでは
なく、きっと好きならば生きてと言うメッセージなんだと思った。そして僕はしばらくの
沈黙の後にこう美紀に伝えた。

「僕は美紀のことが好きだよ。きっと君はそれならば生きてと言いたいんだね。僕はそう
考えて今その答えを出すよ。僕は美紀が好きだ！！ それは何よりも誰よりも負けないく
らい好きだ。だから僕は生きる。だってこの世に美紀が生きて、僕と愛し合った証を僕は
これからも自分の作品の中で証明し、そして僕の作品の中や僕の心の中に美紀を描き(生
き)続けさせるコトが、きっと僕が出来る美紀への感謝の証なんだろうからね」

そして今度は美紀が一言「ありがとう」と僕に言った。

~きっと初めから分かって居たんだろうね

だけど余りにもゆとりの無い生活で忘れかけていたんだね

けどもう僕は二度と忘れない 二度と失いたく無いモノを二度も失うけれど

けど僕はもう二度と忘れない 君が確かにこの世に居たコト

そして確かに僕と君は誰にも邪魔させるコトの出来ない程に愛し合っていたコトに

きっと僕は大丈夫 だって僕は君を失うけれど

だけど君との思い出は永遠に続くのだから・・・~

そして僕等は愛と温もりを確かめ合うように抱きしめ合いながら眠る事になった。きっ
と明日にはこの今感じている温もりは無くなってしまふのだろう。けれど僕は忘れない。
これからもずっと美紀がこの世に存在し、そして僕等が愛し合った事実を・・・。

.....

次の日朝目覚めると美紀はやはり居なかった。けれど昨日と言う事実は確かにあった。
それは美紀のタンスの奥にあった通帳を持って銀行に行って通帳を調べたら、夕べ美紀が
言っていた事が事実だと言う事は明らかだった。そして今度こそ本当に美紀は星に帰っ
たんだろう。けれど星、宇宙人、それは美紀が僕に少しでもロマンティックに描いた嘘かも
知れない。幾ら僕でもそんなコトは有り得ないコトは分かっている。きっと美紀は死んだ

んだ。そして奇跡か、それとも僕の幻想だったのかは分からない。ただ科学や医学では証明出来ないコトで、一周忌の昨日だけ僕の前に美紀は生き返ったんだ。けれどそれが何だったのか僕は追及する気は無かった。とにかく僕は自分の不注意で一度失った美紀に、また会えてそれを償うコトが出来た。そして美紀はこれからの僕の生きる希望を与えてくれて、そして今度こそ心置きなくあの世に旅立ったんだ。勿論昨日の一日だけで僕が美紀に全ての償いが出来た訳ではない。だけど僕は残された人生を自分らしく生きるコトできっと美紀に償えるのだろう。そしてそれこそが美紀が本当に望んでいた・・・幸せ・・・なんだろうと思った。

美紀を失ったあの日から、僕の心の中は完全に空虚感しかなかったような気がする。何をして溜め息しか出ないような日々。そんな僕の余りにも虚しい心を見て美紀はあの世に逝くに逝けなかったのだろう。人は何かを手をしている時には気が付かず、そして失ってから初めてその当たり前だったコトが、どれだけ大切なコトだったのかに気が付く、けれど気が付いた時には既に何も出来ない自分の無力さを痛感する。だけど人は成長をする。多くのモノを手にし、そしてそれだけの多くのモノも失う。だけど本当に必要なコトは失った後に手にするモノを、過去の後悔を踏まえて次に手にしたモノを今度は失わないように努力をするコトが大切なんだろう。そしてきっとそれを人は成長と呼ぶのだろう。僕は最愛の美紀を失って色々なモノを手にした。けれどそれに気付かせてくれたのは、何を隠そうその最愛の美紀だった。だけど僕はその失った美紀を忘れない。僕等がこの世に存在し、そして愛し合った確かな証を・・・。

それから僕は美しい星 Beautiful Star (美星) と言う美紀と僕の星治と言う名前の一部を取り合ったペンネームで、作家として小説を書き続ける決意をした。

~大切なモノ

それは手にしている時には気が付かない

大切なモノ

それは日々の暮らしの中で確かに育まれている

けれど人間は欲深き生き物

だから知らないうちにその大切なモノの存在を忘れかけてしまう

けれど誰の胸にもそれは確かにある

貧しい暮らしの中にも そして裕福な暮らしの中にも それは平等にある

けれど人はその大切なモノの存在を見失ってしまう

そしてその大切なモノは人によっては違うモノだったりもする

そしてもしも生きている間にその大切なモノに気付けたのなら

きっとその人は・・・幸せ・・・の意味を知る

果たして僕は気付けたのだろうか？ 果たして君は気付けるのだろうか？

二度と失いたくないと言う幸せの本当のその意味を・・・～

・・・完・・・

この作品を読んで下さった全ての方に感謝致します。本当にどうもありがとうございました。

作者

齊藤和彦